富本憲吉と西村伊作　　— 暮らしをデザインする二人 —

富本の陶芸は独自の世界に通じる若々しい美がある。だがそれだけではない裏の面も今回は知ってほしい。西村伊作は紀州の新宮に住んでいた。そこに友人である宮本は客になって一緒に陶芸を遊んだことがあった。当時、伊作はわが家の建築はじめ家具や道具や料理まで、世界に通じる美を求めていた。たとえ粗末なものであっても、良いデザインにより豊かとなり、生活が文化的となる。文化とは物質的な贅沢でなく、小さな心の贅沢のある生活なのだ。その思想は富本に影響をあたえ、日常生活にも本職の陶芸と並行して美しいデザインを求めたのであった。

ルヴァン美術館 館長　西村　八知

富本憲吉（1886－1963）

第一回重要無形文化財保持者であり、文化勲章の受章者でもある富本憲吉は、法隆寺にほど近い現在の奈良県安堵村に生まれました。1904 年、東京美術学校図案化に入学。建築を学ぶとともに、ステンドグラス製作に興味を覚え、富本は 1908 年に私費でイギリス留学を果たします。模様（図案）の発見はその時代に始まっています。帰国後、居住空間の変革を模様の展開とともに行った富本は、さまざまな生活芸術（小芸術）革新の試みを行っています。それは若い芸術家たちの共感を呼び、富本は時代のデザイン思想の先駆者となりました。三笠、田中屋、ヴィナス倶楽部などがそれを支えました。
当初、工芸全体の変革に富本はかかわりましたが、本焼きを始めてから以降、仕事は陶芸にしぼられることになります。
そこでも富本は陶芸デザインの変革をしました。李朝の富本、色絵の富本、金銀彩の富本と、富本憲吉は各時代において陶芸を近代化し、そこでも先駆的な役割を果たしました。ですが、いつの場合でも「生活」という居住空間を富本は忘れません。時代時代の文化生活にあった模様と陶磁器、それが富本芸術なのです。

西村伊作（1884－1963）

西村伊作（1884-1963）は和歌山県新宮市に生れ、幼くして熱心なクリスチャンであった両親を震災で失い、山林主の母方の西村家の養子となり、その遺産を引継ぎました。青年期から独学で絵を描き、陶器をつくり、欧米のモダンリビングを取入れた自邸を設計して住み、またアメリカ留学を終えて帰国した医師である叔父大石誠之助と本格的に生活の改善、欧米化を推進しました。多くの芸術家たちと交わり、「生活を芸術として」を実践すると同時に多くの著作によって大正期の人々に新しい生活を啓蒙し続けました。家庭生活を大切にした伊作は、教育にも熱心に取組み、やがて 1921 年（大正 10）私費を投じて東京神田駿河台に現在も自由な教育で知られる「文化学院」を創立し、生徒一人一人の個性を尊重し、自由に育む教育を実践しました。その自由さは戦前二度にわたり公権力の弾圧を受けますが、自らの理想を貫き通した生き方は、大正期を代表するモダニストとして、現在もなお多くの人々に感銘を与えています。

本展初公開：金彩四弁花連続模様飾筥・楽焼イッチン葡萄模様壺・三笠焼

絵手紙　水木要太郎宛　1906 年

楽焼イッチン葡萄模様壺　1913 年

白磁八角コーヒーセット　1921 年

西村アヤ「ピノチョ」原画　1920 年

伊作とその家族　1925 年

文化学院創立当時　1921 年

入館料　：一般800円　大・高600円　中・小400円
（団体割引、身障者割引有り）

ミュージアムショップ　：Le Vent

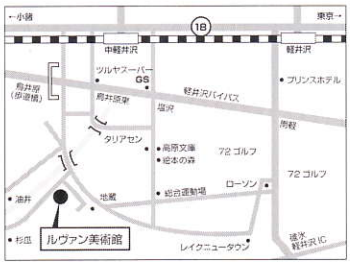
カフェテラス　：Cafe Le Vent

レクチャー・コンサート（無料）：大正の歌とオペラ　暮らしのなかの西洋音楽
8月2日（土）14：30～
ソプラノ：越智まりこ（藤原歌劇団）
講　　師：気谷誠（美術史家・聖学院大学講師）
曲　　目：宵待草、ある晴れた日に、君よ知るや南の国ほか

ギャラリートーク（入館者は無料）：8月　9日(土)14：00～富本憲吉記念館副館長　山本茂雄氏
8月23日(土)14：00～ルヴァン美術館館長　西村八知氏

●JR 長野新幹線「軽井沢駅」下車　又は、乗継ぎ　しなの鉄道「中軽井沢駅」下車で 3km　※夏期は両駅より路線バス運行

●上信越自動車道「碓氷・軽井沢 IC」より 12km
軽井沢バイパス 18 号「鳥井原」
交差点（歩道橋）より杉瓜方面へ
1.5km

●駐車場　20 台収容

このチラシ持参の方は 4 名様まで割引致します。